

男性中年非正規雇用労働者の労働と 生活の展望

ーインタビュー調査の結果からー

崎 直人

本稿は男性中年非正規雇用労働者に焦点を当て、1990年代以降の若年労働市場の不安定化とそれを受けた2000年代以降の若者の仕事への移行に関する研究、また、今日までに行われてきた中年非正規雇用労働者に関する研究を概括し、男性中年非正規雇用労働者が非正規雇用で働き続けざるをえない社会的背景と、同世代の正規雇用労働者や女性中年非正規雇用労働者と比較して社会関係が乏しい理由を、インタビュー調査の結果に基づいて明らかにする。

まず第1章では、男性中年非正規雇用労働者について論じる前提として、学卒後非正規雇用労働で働く者が増加した背景とその実情を見ていく。第1節では、学校を卒業すると同時に就職するという高度経済成長期以降の日本に特徴的な慣習が就職氷河期以降に崩れ、それまで国際的に評価されていた、スムーズな教育から仕事への移行が揺らぎ、学卒後フリーターとして働く者が増大したことを示す。そして第2節では、第1節を受け、2000年代に労働政策研究・研修機構や小杉礼子を中心に行われたフリーターの実証的な把握を見ていく。これらの研究により、フリーターとなる要因、フリーターを経由したキャリアの問題点、フリーターから正社員へ移行する条件など包括的に研究が行われた。しかし、こうした研究は正規雇用で働くことを前提視しており、就職氷河期以降学卒者の一定の層が非正規雇用労働者に就かざるをえない社会構造へと変容したにもかかわらず、かつてのライフコースの基準を再び社会的基準として設定してしまう。第3節では、前節とは異なり、学卒後非正規雇用で働くことを新たな社会標準とみなし、当事者の経験から問題の把握を試みる研究の存在を示す。

次に第2章では、中年非正規雇用労働者について現状でどのような把握がなされているのかを見ていく。第1節では労働政策研究・研修機構により行われた一連の研究である「壮年非正規労働

者の働き方と意識に関わる研究」を主に見ていく。この研究では既婚女性以外の中年非正規雇用労働者の実態や、なぜ非正規雇用労働を行うに至ったか、正規職への転換などキャリアアップの可能性について等包括的に研究されている。一方、この研究からは男性中年非正規雇用労働者が、若年非正規雇用労働者と同等に正規転換したいと考えているにもかかわらず、なぜ実際には正規転換がされにくいのかという点、単身女性中年非正規雇用労働者と比較してなぜ社会関係が乏しいのかという点が明らかにされておらず、本論文でそれらを明らかにすることを示す。第2節では、中年非正規雇用の問題を女性、特に単身女性に焦点を当てた先行研究を検討する。元来日本型雇用において女性は結婚・出産に伴う退職と、出産後のパートタイム労働に従事するという差別構造が成立していたが、それが崩れつつあり、徐々にではあるが女性の正規職での長期雇用が拡大している。しかし、それは女性にとって働きやすい環境になったことを必ずしも意味せず、単身女性中年非正規雇用労働者は、結婚や介護などのジェンダー規範による差別を受けながら、不安定な雇用の下働いていることが示されている。

第3章では、インタビュー調査を行った結果から、第2章第1節で示した課題について検討する。まず第1節でインタビュー調査の概要を説明する。また、次節以降での調査内容の理解を促すため、あらかじめ調査協力者である5名のインフォーマントのそれぞれの特徴を示す。次に第2節では、調査協力者であるインフォーマントそれぞれが学卒以降からインタビュー時点までどのように働いてきたのかを詳細に記し、ここから小売業やサービス業の不安定さ、インフォーマントそれぞれがフルタイム並みかそれ以上の長時間の労働に従事していることを確認する。第3節では前節を受け、インフォーマントそれぞれが今後の働き方や生活に関するどのような展望を持っているのかを示し、そこから本論文の課題のひとつである、なぜ男性中年非正規雇用労働者は正規転換を望んでいるにもかかわらず正規転換がされにくいのかについて答える。この理由として、第一に「就職活動」を行う時間がないこと、第二に男性中年非正規雇用労働者が現在就いている職を辞してまで就くに価値のある仕事がないことを挙げ、詳細を説明する。最後に第4節では男性中年非正規雇用労働者の社会関係に着目し、なぜ彼らが同年代の正規雇用者や女性中年非正規雇用労働者よりも社会関係が乏しいのかについて議論する。本調査では残念ながら解明できなかった点も多いが、男性中年非正規雇用労働者が「仕事関係」の人間関係が乏しい理由は、非正規雇用労働ではスーパーなどの小売業に顕著であるが、同じ待遇で働く同年代の男性が職場に少ないためであることを示す。

終章では本論の議論を整理し、結論とそこから示唆されるもの、また今後の課題を示す。本論文では、主に労働政策研究・研修機構によって行われてきたフリーター研究や中年非正規雇用労働者研究が、実態の把握のための基礎的なデータを蓄積してきた貢献を評価しながらも、それらの研

究が正規転換を問題解決のゴールとして非常に重視されていることに異議を唱える。そうした移行に関して、非正規雇用労働が労働市場においては求められている存在であり、そうした市場の構造に触れなければ正規転換を望む者すべてが転換することは難しいことと、そのような市場の構造を踏まえるならば非正規雇用でも働き生活し続けることを可能にする条件を明らかにすること、また本論で見る正規転換を妨げる非正規雇用労働の生活の実情を踏まえ、そのように移行を望む人が正規転換に踏み出すことが可能になる社会的サポートが求められていることを主張する。